

研 究

発達障害の特徴をもつ子どもの母親が保育所・幼稚園
選定時期に抱く思いと育児肯定感に影響する要因赤羽根章子¹⁾, 堀田 法子²⁾

〔論文要旨〕

発達障害の特徴をもち療育施設に通う子どもの母親が、保育所・幼稚園を選定する時期は、危機的時期と考えられるため育児肯定感を高めるような支援が必要である。園選定時期の母親の思いの実態や、育児肯定感に影響する要因を明らかにすることを目的に、A県2市6療育施設に通う次年度入園を控える子どもの母親を対象に無記名自記式質問紙法を実施した。100名から回答を得（回収率82.0%）、87名を分析対象（有効回答率71.3%）とした。園選定時の母親の思いは、夫をはじめ相談者に対し満足しているが、悩み度は高かった。園選定時の母親の育児肯定感、園選定時相談者に対する満足度、夫婦関係満足度、療育継続期間が影響要因として挙げられ、育児肯定感を高めるための支援の示唆を導き出すことができた。

Key words : 保育所・幼稚園選定時, 育児肯定感, 母親の思い, 発達障害児

I. はじめに

近年、発達障害の早期発見や早期療育に関心が高まり、児や家族への支援が求められている^{1~4)}。「発達障害」は発達障害者支援法¹⁾において、自閉症、アスペルガー症候群、その他の広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、その他これに類する脳機能の障害と定義される。2014年、DSM-5で疾患分類が変更され、新しく自閉症スペクトラム障害（ASD）となり、これまでの自閉症障害、アスペルガー障害等が包括された。ASDは典型的には生後2年目の間に気づかれるが、症状が重度であれば12か月より早期に、軽微であれば24か月以降に気づかれる⁵⁾。市町村では乳幼児健康診査等母子保健事業を行い、発達障害児の早期発見と継続支援に努め、必

要時療育機関を紹介している。

早期療育を受ける子どもは、療育中に保育所、幼稚園、統合保育実施園などの就学前施設への入園時期を迎える。牛尾⁶⁾は、重症心身障害児の母親にとっては入園・入学時は危機の時期の一つであるという。発達障害児は、社会性のトレーニングができ、楽しい幼児期を送るための場所の確保が重要であり、母子への支援や協力を得るためにも子どもに合った入園先が選ばれる必要がある⁷⁾。しかし、軽度発達障害児は保育所・幼稚園入園を断られるケースがみられると報告があり⁸⁾、また、自閉症児は就学前施設の選択の際、児に適した施設がわからない、相談者がいないなどの困難を抱えている⁹⁾という。集団生活困難やコミュニケーション問題、こだわり、対人関係問題といった発達障害の特徴をもつ子どもが、入園後、健常児とともに過

A Mother's Positive Feeling as a Factor in Rearing Child with Developmental Disability Focus on Choosing a Preschool

Akiko AKABANE, Noriko HOTTA

1) 愛知さわかみ看護短期大学（研究職）

2) 名古屋市立大学看護学部（研究職）

刷刷請求先：赤羽根章子 愛知さわかみ看護短期大学 〒491-0063 愛知県一宮市常願通5丁目4番1

Tel : 0586-28-8110 Fax : 0586-25-2800

〔2717〕

受付 15. 3. 17

採用 15.12.28

ごす集団生活を考えると、母親の心理的不安は大きいと考えられ、入園先を選定し決定する時期は、母親にとって支援の必要な時期といえる。一方、軽度発達障害児の母親は、「不安感」、「負担感」といった否定的感情だけでなく「発達可能性への期待感」、「社会支援への期待感」といった肯定的感情ももっている¹⁰⁾。育児は、母親の肯定的感情が基底をなしており、確固としているために育児不安が喚起されることはなく¹¹⁾、サポートの受容が育児肯定感のようなポジティブな側面に働くことで間接的にネガティブな感情を低めることに役立っている¹²⁾。つまり、育児は、育児を楽しみと感じたり、育児をすることに意味を感じたり、子どもの発達に対し、喜び期待を寄せるような肯定的感情を基盤にもっていることで、育児負担や育児不安といったネガティブな感情を軽減することができると考えられる。よって発達障害の特徴をもつ子どもの保育所・幼稚園入園先選定時期における母親の育児肯定感に注目し、育児肯定感を高める支援を検討する必要があると考える。

II. 研究目的と定義

1. 研究目的

発達障害の特徴をもつ子どもの母親が保育所・幼稚園選定時に抱く思い、および育児肯定感に影響する要因を明らかにすることである。

2. 操作的定義

発達障害の特徴をもつ子ども：乳幼児期は発達障害の確定診断を受けていない場合が多いため、医学的診断の有無にかかわらず、発達障害の特徴的な症状をもつことを母親が認識する子どもとする。

保育所・幼稚園（以下、園）選定時：保育所・幼稚園・統合保育実施園等への入園先を選定している時期とする。

III. 研究方法

1. 調査対象者

A 県 B 市、C 市の 6 療育施設に通っている、次年度入園を控える発達障害の特徴をもつ子どもの母親 122 名を対象とした。

2. 調査期間

調査期間は、療育に通う子どもが次年度地域の園

など入園先の希望が決定し終わった時期を選定した。2012 年 1～3 月である。

3. 調査方法

調査方法は、無記名自記式質問紙法とした。入園を控える対象者の選定と質問紙配布は各施設職員に依頼し、後日施設に用意した回収袋にて回収した。質問紙の回答は、子どもの入園先を選定している頃（数か月前）を想起して記入するように質問紙の冒頭に明記した。

4. 調査内容

i. 母親・子どもの属性および母親が認識する子どもの発達の特徴

属性は、母親の年齢、仕事や自由時間の有無、家族構成、子どもの年齢、性別、療育開始時期、療育継続期間、長所の有無、発達上の問題、発達についての困り具合について回答を求めた。発達上の問題は、驚見¹³⁾による 3 歳児の PDD 児の主な特徴「対人問題」、「コミュニケーション問題」、「こだわり問題」、「集団生活困難」の 4 分類の各項目で最も当てはまるものを選択制とした。発達についての困り具合は、4 件法（「1. ある」～「4. ない」とし、1・2 を「困っている」、3・4 を「困っていない」とした。

ii. 入園に関する状況および思い

母親が認識する、入園先を考え始めた子どもの年齢、入園先が決定した時期の子どもの年齢、園選定時の相談者や、情報の収集先について回答を求めた。園選定時に抱く母親の思いは、先行研究⁸⁾を参考に、母親の園選定時の相談者や、入園先情報収集に対する満足度、園選定時の悩み度、入園希望先での拒否的経験、入園後の発達期待度を挙げ、4 件法（「1. 全くあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」）で回答を求めた。

iii. 育児に対する自己効力感（PSE 尺度）

育児に対する自己効力感尺度¹⁴⁾を使用した。13 項目 5 件法（「1. そう思わない」～「5. そう思う」、ただし逆転項目は、5 点を 1 点）の合計得点を算出する。点数が高いほど、育児に対する自己効力感が高いことを示す。

iv. 子どもの発達で悩んだ時の理解者と夫の育児協力、夫婦関係満足度

理解者は、最も理解者と感じる一人を選択回答とした。夫の育児協力は、「育児参加」と「精神的支え」

に分け、4件法（「1.ほとんどあてはまらない」～「4.かなりあてはまる」とし、1・2を‘なし’、3・4を‘あり’）とした。夫婦関係満足度は、夫婦関係満足尺度¹⁵⁾を使用した。6項目4件法（「1.ほとんどあてはまらない」～「4.かなりあてはまる」）で回答を求め、合計得点を算出した。点数が高いほど、夫婦関係に満足していることを示す。

v. 育児肯定感

育児感情尺度¹⁶⁾は、「育児の束縛による育児負担感」、「子どもの態度行為による育児負担感」、「育て方の不安感」、「育ちへの不安感」、「育児肯定感」の5つの下位尺度から構成され、今回は「育児肯定感」を使用した。回答は、4件法（「1.まったくない」～「4.よくある」）で求め、各下位尺度で合計得点を算出する。点数が高いほど育児肯定感が高いことを示す。

5. 分析方法

SPSSver.19.0を使用し、Mann-WhitneyのU検定、Kruskal-Wallisの検定を用いて行った。育児肯定感に影響する要因は、ロジスティック回帰分析（変数増加法、尤度比）を行った。有意水準は、 $p < 0.05$ を統計学的有意とした。

6. 倫理的配慮

A県B市、C市の6療育施設責任者に研究の主旨を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。施設を管理するB市保育課には研究協力施設責任者から研究主旨を説明し、文書で許可を得た。C市児童課には研究者が文書と口頭で説明し、文書で許可を得た。

研究協力者である母親に対して研究の目的、方法、意義、個人情報保護、協力は任意、質問紙の回答をもって研究同意とみなすことを文書で説明した。本研究は名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会で研究の承認を得て実施している（承認番号11030）。

IV. 結 果

2市の6療育施設の合計122名に質問紙を配布し、100名から回答を得、欠損のみられたもの等を除き、87名を分析対象とした。有効回答率は71.3%であった。

1. 対象者の背景（表1）

母親は平均年齢36±5歳、子どもは3歳4±4か月であり、男児が70名（80.5%）、平均療育開始年齢は

2歳7±8か月、平均療育継続期間は9±7か月であった。

母親が認識する子どもの発達上の問題は、集団生活困難33名（38.1%）が最多であった。子どもの発達に「困っている」母親は83名（95.4%）とほとんどの母親が困っていた。

2. 入園に関する状況（表2）

子どもの入園先は、「保育所（障害児枠）」が最も多く34名（39.1%）、入園先を考え始めた時期は、子どもの年齢が平均2歳6±7か月、入園先を決定した時期は、平均2歳10±6か月であり、平均入園選定期間は3±4か月と、短期間で入園先を決定していた。

園選定に対する相談者は家族と答えたものは58名（66.7%）であり、中でも夫が51名（58.7%）を占めた。

3. 園選定時に抱く母親の思い（表3）

園選定時の相談者に対する満足度の平均得点は3.17±0.81点で、相談者相手による満足度得点に有意差は

表1 対象者の背景

N=87		
	n	(%)
母親の年齢	Mean ± SD	
子どもの年齢	36 ± 5歳	
子どもの性別	3歳4 ± 4か月	
男児	70	(80.5)
女児	17	(19.5)
子どもの出生順位		
第1子	58	(66.7)
第2子以降	28	(32.2)
無回答	1	(1.1)
療育開始年齢	2歳7 ± 8か月	
療育継続期間（か月）	9 ± 7か月	
母親が認識する子どもの発達上の問題		
集団生活困難	33	(38.1)
コミュニケーション	21	(24.1)
こだわり	10	(11.5)
対人関係	9	(10.3)
その他	3	(3.4)
無回答・順位不明	11	(12.6)
母親の子どもの発達についての困り具合		
困っている	83	(95.4)
困っていない	4	(4.6)
子どもの長所の把握		
あり	81	(93.1)
わからない	6	(6.9)

表 2 入園に関する状況

	N=87		
	n	(%)	Mean ± SD
入園先			
保育所（障害児枠）	34	(39.1)	
保育所	22	(25.3)	
幼稚園	20	(23.0)	
来年度は入園しない	10	(11.5)	
無回答	1	(1.1)	
入園先を考え始めた子どもの年齢	84		2歳6±7か月
入園先を決定した子どもの年齢	84		2歳10±6か月
入園先選定期間	83		3±4か月
園選定の相談者			
家族	58	(66.7)	
夫	51	(58.7)	
夫以外の家族	7	(8.0)	
社会的支援者	23	(26.3)	
療育保育士，保育士	13	(15.0)	
医師，心理士	4	(4.5)	
親の会，友人・療育仲間	4	(4.5)	
保健師	2	(2.3)	
その他	4	(4.7)	
無回答	2	(2.3)	
園情報の収集先			
家族	7	(8.0)	
夫	2	(2.3)	
夫以外の家族	5	(5.7)	
社会的支援者	51	(58.7)	
療育保育士，保育士	29	(33.5)	
親の会，友人・療育仲間	21	(24.1)	
保健師	1	(1.1)	
社会資源	19	(21.8)	
入園先，支援センター，児童館	16	(18.4)	
パンフレット，インターネット	3	(3.4)	
その他	8	(9.2)	
無回答	2	(2.3)	

みられなかった。入園情報収集への満足度の平均得点は、 2.95 ± 0.84 点で、入園情報収集先による満足度得点に有意差はみられなかった。母親の希望入園先での拒否的経験の平均得点は 1.73 ± 0.93 点であり、希望入園先からの拒否的経験は少なかったが、発達の悩み度は 3.27 ± 0.85 点と、悩みが大きかった。入園後の子どもの発達への期待度は 3.70 ± 0.49 点と、各平均得点を比較すると、園選定時の悩み度や拒否的経験より入園後の発達期待が最も高かった。

4. 母親の育児に対する自己効力感（表 4）

育児に対する自己効力感尺度（PSE 尺度）の13項目に対して信頼性は、Cronbach $\alpha = .860$ を示した。PSE 尺度の平均合計得点は 45.85 ± 8.41 点であった。

表 3 入園に関する母親の思い

	n	Mean	SD	Median (Min~Max)	有意 確率
園選定時の相談者の満足度	86	3.17	.81		
家族	58	3.19	.81	3 (1~4)	n.s
社会的支援者	23	3.39	.58	3 (2~4)	
入園情報収集への満足度	86	2.95	.84		
家族	7	3.43	.79	4 (1~4)	n.s
社会的支援者	51	2.98	.81	3 (1~4)	
社会資源	19	2.79	.79	3 (1~4)	
園選定時悩み度	86	3.27	.85	3 (1~4)	
入園希望先での拒否的経験	83	1.73	.93	1 (1~4)	
入園後の発達への期待	86	3.70	.49	4 (2~4)	
4件法（「1. 全くあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」）で回答を求めた。 Mann-WhitneyU 検定，Kruskal-Wallis の検定， n.s.; not significant					

表 4 自己効力感（PSE）および夫婦満足度得点

	n	Mean	SD
PSE 尺度得点	85	45.85	8.41
夫婦満足度得点	81	18.43	4.37

自己効力感 PSE 尺度：「1. そう思わない」～「5. そう思う」の5件法で13項目の合計点

夫婦関係満足尺度：「1. ほとんどあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」の4件法で6項目の合計点

表 5 育児肯定感

	N=87	
	Mean	SD
子どもを育てるのは楽しいと思う	3.29	.75
子どもを育てることは、有意義ですばらし いことだと思う	3.20	.82
子どもの成長が楽しみだと感じる	3.44	.74
子どもを育てることによって、自分も成長 しているのだと感じる	3.36	.81
合計	13.28	2.77

育児感情尺度 Cronbach の $\alpha = .857$ (21項目)

育児感情尺度の下位尺度：「1. まったくない」～「4. よくある」の4件法

5. 夫婦関係満足度（表 4）

夫婦関係満足尺度の 6 項目に対して信頼性は Cronbach $\alpha = .954$ を示した。夫婦関係満足尺度の平均得点は 18.43 ± 4.37 点であった。

6. 育児肯定感（表 5）

育児感情尺度21項目に対して信頼性は Cronbach $\alpha = .857$ を示した。育児肯定感尺度（4 項目）の平均合計得点は 13.28 ± 2.77 点であった。

表6-1 単変量解析による育児肯定感に関連する要因(1)

要因	肯定感低群 肯定感高群		B	オッズ比	95% 信頼区間 下限 ～ 上限	有意確率	
	≤15 n	16< n					
母親の要因							
母親の年齢			.09	1.09	.43 ～ 2.75	.86	
	35歳以下	28	12				
	36歳以上	30	14				
母親の仕事			-.12	.89	.21 ～ 3.74	.88	
	あり	7	3				
	なし	52	25				
母親の自由時間			.48	1.62	.61 ～ 4.31	.34	
	あり	34	20				
	なし	22	8				
育児に対する自己効力感			1.76	5.83	2.04 ～ 16.64	.001 **	
	低群（46点以下）	35	6				
	高群（47点以上）	22	22				
子どもの要因							
子どもの年齢			.19	1.20	.49 ～ 2.98	.69	
	3歳2か月以前	28	12				
	3歳3か月以降	31	16				
子どもの性別			-.49	.61	.21 ～ 1.83	.38	
	男児	49	21				
	女児	10	7				
子どもの出生順位			.03	1.03	.39 ～ 2.70	.95	
	第1子	39	19				
	第2子以降	19	9				
療育開始年齢			-.46	.63	.26 ～ 1.57	.32	
	2歳7か月以前	27	16				
	2歳8か月以降	32	12				
療育継続期間			.99	2.68	1.04 ～ 6.89	.04 *	
	7か月以下	33	9				
	8か月以上	26	19				
子どもの長所の把握			-	-	-	-	
	あり	53	28				
	わからない	6	0				
子どもの発達の困り具合			.37	1.45	.14 ～ 14.56	.75	
	困っている	56	27				
	困っていない	3	1				
子どもの発達上の問題							
	集団生活困難	19	14	.64	1.90	.73 ～ 4.97	.19
	コミュニケーション	15	6	-.36	.70	.23 ～ 2.09	.52
	こだわり	5	5	.76	2.14	.56 ～ 8.21	.27
	対人関係	8	1	-1.40	.25	.03 ～ 2.12	.20
家族の要因							
家族構成			-.38	.69	.23 ～ 2.02	.50	
	核家族	48	21				
	拡大家族	11	7				
夫の育児協力			.96	2.62	.79 ～ 8.70	.12	
	あり	39	24				
	なし	17	4				
夫の精神的支え			.96	2.62	.79 ～ 8.70	.12	
	あり	39	24				
	なし	17	4				
夫婦関係満足			1.62	5.06	1.56 ～ 16.41	.007 **	
	低群（17点以下）	27	4				
	高群（18点以上）	32	24				
子どもの発達で悩んだ時の理解者							
	家族	43	22	.36	1.43	.46 ～ 4.49	.54
	家族以外	14	5				
	夫	25	17	.78	2.18	.85 ～ 5.57	.11
	夫以外	32	10				
	社会的支援者	6	2	-.39	.68	.13 ～ 3.61	.65
	社会的支援者以外	51	25				

各要因に対し名義尺度は「あり」を1, 「なし」を0, 子どもの性別は男児を1, 女児を0, 出生順位は第1子を1, 第2子以降を0, 家族構成は核家族を1, 拡大家族を0とした。間隔尺度は中央値高群を1, 低群を0とし, 単変量解析に投入した。

**p<.001, *p<.005

表 6-2 単変量解析による育児肯定感に関連する要因（2）

要因		肯定感低群	肯定感高群	B	オッズ比	95% 信頼区間 下限 ～ 上限	有意確率
		≤15 n	16< n				
園選定時における要因							
入園先							
	保育園	16	6	-.33	.72	.25 ～ 2.09	.54
	保育園障害児枠	23	11	-.02	.99	.39 ～ 2.48	.97
	幼稚園	13	7	.20	1.22	.42 ～ 3.54	.72
	来年度入園しない	6	4	.37	1.44	.37 ～ 5.60	.60
園選定考え始め時期							
	2歳5か月以前	19	6	.49	1.62	.56 ～ 4.71	.37
	2歳6か月以降	39	20				
園選定時相談者							
	家族	40	18	-.17	.84	.30 ～ 2.35	.75
	社会的支援者	15	8	.17	1.19	.43 ～ 3.30	.75
園選定情報収集先							
	家族	4	3	.49	1.64	.34 ～ 7.94	.54
	社会的支援者	36	15	-.41	.67	.25 ～ 1.80	.42
	社会資源	12	7	.26	1.30	.44 ～ 3.84	.64
入園先決定時期							
	2歳9か月以前	25	10	.19	1.21	.47 ～ 3.12	.69
	2歳10か月以降	33	16				
園選定期間							
	1か月以下	25	9				
	2か月以上	32	17	.39	1.48	.56 ～ 3.86	.43
相談者に対する満足度							
	かなりあてはまる	15	18	1.77	5.87	2.18 ～ 15.82	.00 **
	それ以外	44	9				
情報収集への満足度							
	かなりあてはまる	11	11	1.01	3.00	1.09 ～ 8.23	.03 *
	それ以外	48	16				
園選定時悩み度							
	かなりあてはまる	25	17	.84	2.31	.91 ～ 5.90	.08
	それ以外	34	10				
入園希望先での拒否的経験				-	-	-	-
	かなりあてはまる	4	0				
	それ以外	54	25				
入園後の発達期待度							
	かなりあてはまる	37	24	1.56	4.76	1.28 ～ 17.65	.02 *
	それ以外	22	3				

各要因に対し「あり」を1,「なし」を0とし、間隔尺度は中央値高群を1, 低群を0とし、順序尺度は、「かなりあてはまる」を1,「それ以外」を0とし、単変量解析に投入した。**p<0.01, *p<0.05

7. 育児肯定感に影響する要因

育児感情尺度の育児肯定感を従属変数とし、最高得点である16点群28名（32.2％）と低得点である15点以下群59名（67.8％）の2群に分けた。独立変数は、母親の要因、子どもの要因、家族の要因、園選定時における要因とした。

i. 単変量解析による育児肯定感に影響する要因

（表 6-1，表 6-2）

母親の要因、子どもの要因、家族の要因、園選定時の要因のうち、単変量解析で有意差がみられたものは、育児に対する自己効力感高群、療育継続期間 8 か月以上、夫婦関係満足度高群、相談者に対する満足度、情報収集への満足度、入園後の発達期待度の 6 要因であった。

ii. ロジスティック回帰分析による育児肯定感に影響する要因（表 7）

単変量解析で有意差がみられた独立変数 6 要因間の相関係数を spearman の順位相関係数を用いて確認したところ、 $r = .50$ を超える独立変数間の相関はみられず、多重共線性は低いと判断し、6 要因を独立変数としてロジスティック回帰分析（変数増加法、尤度比）を行った。その結果、園選定時相談者に対する満足度（OR = 7.42, 95 % CI = 2.34～23.57, $p = 0.001$ ）、夫婦関係満足度高群（OR = 6.04, 95 % CI = 1.60～22.80, $p = 0.008$ ）、療育継続期間 8 か月以上（OR = 3.79, 95 % CI = 1.17～12.24, $p = 0.026$ ）が影響要因として挙げられた。ロジスティック回帰分析のモデルは $p = 0.000$ 、判別的中率は 76.2%, Nagelkerke R 2 乗 0.37 であった。

表7 ロジスティック回帰分析による育児肯定感に関連する要因

		95% 信頼区間		有意確率
		B	オッズ比	
相談者に対する満足度	(1;かなり, 0;それ以外)	2.00	7.42	2.34 ~ 23.57 .001 **
夫婦関係満足度	(1;高群, 0;低群)	1.80	6.04	1.60 ~ 22.80 .008 **
療育継続期間	(1;8か月以上, 0;7か月以下)	1.33	3.79	1.17 ~ 12.24 .026 **
モデル p=0.000		ロジスティック回帰分析		
判別の中率 76.2%		変数増加法 (尤度比)		
Cox-Snell R2 乗 0.27		**p<0.01		
Nagelkerke R2 乗 0.37				

V. 考 察

1. 対象の特徴と園選定時の状況

発達障害は男性が女性の約4倍²⁾で、今回の対象児も同様に男児が多く、子どもの療育開始年齢も母子通園施設入園時平均年齢2.52±0.70歳¹⁷⁾と報告があり、先行研究同様の集団である。今回の対象児では、母親が認識する発達上の問題は、集団生活困難問題が38.1%と一番多く、発達障害の特徴をもつ子どもは集団生活での困難が生じることがうかがえる。早期療育により集団生活を経験したことで、母親は子どもの集団生活上の問題を早期に直視できていたとも考えられる。

療育に通う子どもの入園先は保育所の障害児枠が多く、約40%であった。障害児保育実施箇所や対象児童数が年度ごとに微増している中、加配保育士の採用など適切な配慮がなされやすく¹⁸⁾、母親が、より良い環境を求めた結果、障害児枠を選択した割合が高かったことが考えられる。

2. 園選定時に抱く母親の思い

本研究の結果では、園選定時の相談者や情報収集への満足度については平均3点前後と比較的高いことから、発達障害児と母親の支援が社会的に充実してきたことも考えられる。情報収集への満足度については、母親は、行政側からの情報があまりないという不満をもっており¹⁹⁾、今回の結果からも情報収集先が社会資源の場合が家族の場合よりやや満足度が低かった。園選定時に相談できる行政の体制づくりや情報提供の充実が望まれる。

師田⁸⁾が行った2003年の調査では、軽度発達障害の特徴から幼稚園に受け入れてもらえない、入園を断られた、好意的でない対応をされたなどのケースがみられたが、本研究では入園先での拒否的経験の平均得点は1点台と低い結果であった。発達障害者支援法が施

行され約10年が経過し、現在、保健所・保育所などの支援関係機関のネットワークの構築が推進された¹⁸⁾結果と推測される。しかし、強い拒否的経験をした母親が存在していたことから、実態を詳細に調査し、対応策を考えていくことも必要であると考ええる。

入園後の子どもの発達期待は平均3.70±0.49点と、悩み度や拒否的経験と比較して最も高かった。渡邊らの研究²⁰⁾によると、高機能広汎性発達障害の子どもの入園前の親のストレスとして「新環境への不安」に次いで「成長への大きな期待」が挙げられており、母親は入園後の生活に対し、子どもの成長への期待が大きいことがうかがえる。母親の子どもに対する発達への期待は、育児を前向きに捉える原動力になる一方、その期待に子どもの発達がそぐわない可能性もあり得る。発達への期待と子どもの発達の状況がかけ離れないよう、入園後においても集団生活による子どもの状況を入園先の保育士や幼稚園教諭と母親が共有するといった支援が望まれる。今後、入園後において、母親の発達への期待がどのように変化したか継続調査していくことも課題であると考ええる。

3. 育児肯定感

育児肯定感は健常児母親の14.29±1.71点²¹⁾に対し、今回の対象では13.28±2.77点と若干低い結果であった。母親は、早期療育で同じ境遇の母親との交流があり、また、療育保育士との関わりもみられることから、育児肯定感が比較的保たれていたと推測される。

4. 母親の育児肯定感に影響する要因と支援の方向性

育児肯定感を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、園選定時相談者に対する満足度、夫婦関係満足度、療育継続期間の順に影響度が高いことが示された。健常児の母親の育児肯定感は、夫婦関係の良好さ²²⁾、夫婦関係・相談サポートの多さや自尊感情が高いこと²³⁾との関連が報告されている。発達障害

の特徴をもつ子どもの園選定時においても、母親の育児肯定感に影響する要因は、母親・子どもの属性や特性ではなく、母親の園選定時の相談者に対する満足度、夫婦関係満足度という主観的な認知の影響が強いことが明らかとなった。

育児肯定感に最も影響を与えた要因は、園選定時の相談者に対する満足度であった。相談者相手による満足度得点に有意差はみられなかったが、家族との相談で満足が得られなかった場合は、支援の方法として相談先の周知が必要と考える。園選定期間は子どもが3歳前であることが多いことから、療育施設や入園先となる地域の園での相談、市町村保健センターでの育児相談日などの利用も候補として挙げられる。また、相談者となった社会的支援者は、母親が相談に対し満足感を得られる対応ができるよう、カウンセリング技術の習得といった資質の向上に努めることが望まれる。

次に、夫婦関係満足度が影響していることが明らかとなった。夫婦関係満足得点は 18.43 ± 4.37 点であり、幼稚園・保育所に通う健常児の母親の夫婦関係満足得点 18.31 ± 3.82 点¹⁸⁾と比較するとわずかに高かった。近年、発達障害児の父親の自助活動²⁴⁾が全国的にみられはじめ、父親がわが子の発達特徴を理解し育児参加を果たしている。小島ら²⁵⁾は、障害児の父親が母親とよく話し子どもの特性を理解することが、母親の育児を前向きに捉えることと関連していると指摘している。夫婦関係満足が高まるためには、父親と母親が子どもの発達特徴を同じように捉え、子どもにとって良い園の選定がなされるように話し合う機会をもつなど、夫婦で育児を行うことが必要で、結果として育児肯定感が高まると考える。発達障害の特徴をもつ子どもの父親が抱く思いや育児への認識などを含めた家族支援が今後必要であると考えられる。

また、療育継続期間が8か月以上であることが影響していると示唆された。育児肯定感は早期療育により高まることが報告されている²⁶⁾。療育が長く継続されると、子どもの発達特性がより理解でき、支援者である療育保育士との信頼関係が生まれ、園選定時の相談がしやすいことや、同じ境遇にある母親との仲間意識がみられ入園先に対する情報をお互いに交換できるといった効果が期待できると考えられる。母親の育児肯定感に影響する要因の一つとして8か月以上の療育継続期間をとることの必要性も示唆された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、危機の時期と考えられる、発達障害の特徴をもつ子どもの入園先選定期間に焦点をあて、母親の思いと育児肯定感に影響する要因が明らかになった。しかし、地域が限定されており、発達障害に対する市町村による支援策の格差が認められている現時点では、得られた結果を一般化するには難しい。

今後は、療育を受けていない発達障害の特徴をもつ子どもの母親をも含めた全国レベルでの研究が行われること、園選定時に抱く母親の思いの内容を質的に分析することが課題である。

謝 辞

子どもに発達特性がみられ、危機の時期である入園前期であるにもかかわらず本研究主旨に理解を示し、ご協力いただいた母親と施設責任者に感謝致します。

なお、本研究は、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程に提出した修士論文を一部修正・加筆したものである。本研究の一部を第19回日本家族看護学術集会および第60回日本小児保健協会学術集会にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省. 発達障害者支援法. (2015年1月3日アクセス) <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0412-1.html>
- 2) 神尾陽子. ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者に対する支援のための手引き. 国立精神・神経センター精神保健研究所, 2010; 1-38.
- 3) 笹森洋樹, 後上鐵夫, 久保山茂樹, 他. 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 2010; 37: 3-15.
- 4) 楠 凡之. 発達障害児の特別なニーズと家族支援. 障害者問題研究 2009; 37 (1): 12-20.
- 5) 高橋三郎, 大野 裕, 染谷俊幸訳. 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害. 日本精神神経学会. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 第1版第3刷. 東京: 株式会社医学書院, 2014: 49-57.
- 6) 牛尾禮子. 重症心身障害児(者)をもつ母親の危機時期(Crisis Periods)に関する研究. 吉備国際大学保健科学部紀要 1997; 2: 1-6.
- 7) 若子理恵. Ⅲ発達障害を「育ち」から見る 幼児期.

- 田中康雄. 発達障害の理解と支援を考える. 臨床心理学増刊第2号. 東京: 金剛出版, 2010: 63-68.
- 8) 師田恵美. 障害をもつ子どもの発達と親の思い. 発達 2005; 26 (103): 79-88.
 - 9) 堺 博美, 中山貴美子, 高田 哲. 事例検討からみた幼児期の自閉症児とその家族における就学前ニーズの分析. 保健師ジャーナル 2009; 65 (8): 670-675.
 - 10) 吉田優英, 宗方比佐子, 都築繁幸. 軽度発達障害児の母親のストレス因子に関する研究. 障害者教育・福祉学研究 2009; 5: 85-93.
 - 11) 住田正樹. 母親の育児不安と夫婦関係. 子ども社会研究 1999; 5: 3-20.
 - 12) 荒牧美佐子, 田村 毅. 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャルサポートの規定要因—幼稚園児を持つ母親の場合—. 東京学芸大学紀要6部門 2003; 55: 83-93.
 - 13) 鷺見 聡. 幼児期の広汎性発達障害・自閉症. 小児科診療 2010; 73 (4): 37-41.
 - 14) 金岡 緑. 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale: PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 2011; 70 (1): 27-38.
 - 15) 諸井克英. 家庭内労働の分担における公平性の知覚. 家族心理学研究 1996; 10 (1): 15-30.
 - 16) 荒牧美佐子. 育児感情尺度. 堀 洋道. 心理測定尺度集 VI—現実社会とかかわる〈集団・組織・適応〉—. 初版. 東京: 株式会社サイエンス社, 2011: 219-223.
 - 17) 大鐘啓伸. 母子通園施設を利用した母親の心理状態 支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから. 発達心理学研究 2011; 22 (3): 308-317.
 - 18) 厚生労働省編. 平成24年度版厚生労働白書. 東京: 日経印刷, 2012: 480-481.
 - 19) 相浦沙織, 氏森英亜. 発達障害児をもつ母親の心理的過程—障害の疑いの時期から診断名がつく時期までにおける10事例の検討—. 目白大学心理学研究 2007; 3: 131-145.
 - 20) 渡邊裕子, 伊藤良子, 宋 慧珍. 高機能広汎性発達障害の子どもをもつ親の入園・就学前のストレスに関する研究. 発達障害研究 2006; 28 (1): 72-84.
 - 21) 荒牧美佐子. 幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化. 家庭教育研究所紀要 2008; 30: 139-149.
 - 22) 荒牧美佐子. 育児への否定的・肯定的感情とソーシャルサポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—. 小児保健研究 2005; 64 (6): 737-744.
 - 23) 安藤智子, 荒牧美佐子, 岩藤裕美, 他. 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ—子育て支援利用との関係—. 保育学研究 2008; 46 (2): 99-108.
 - 24) 特定非営利活動法人おやじりんく. (2015年2月20日アクセス) <http://www oyajilink.net/index.php>
 - 25) 小島未生, 田中真理. 障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究. 特殊教育学研究 2007; 44 (5): 291-299.
 - 26) 溝部 恵. 発達障害児を持つ母親の育児感情—両親が協力しやすい育児環境づくりへの検討—. 人間発達研究所紀要 2011; 22・23合併号: 27-48.

[Summary]

The time when the mother of a child with developmental disability chooses a preschool is regarded as a critical period. It is necessary at that time for her to develop positive feeling in child rearing. The purpose of this study was to investigate the mother's feeling by focusing on her choice of a preschool and identifying factors related to positive feeling. One hundred mothers of children with developmental disability who would enter preschool the next year in A prefecture, 2 city 6 facility participated in a questionnaire survey (recovery rate 82.0%). Eighty-seven children were analyzed (valid response rate 71.3%). A mother's feeling while choosing a preschool are consoled by consultation with someone such as her husband, but distress remains high. A mother's positive feeling when choosing a preschool was related to the degree of satisfaction she had during consultation when choosing a preschool, her degree of marital satisfaction, and the duration of school attendance. These findings suggest that increasing consultation technique, sufficient discussion with mother and father about child rearing, and adequate school attendance are important for the mother.

[Key words]

preschool choice,
mother's positive feeling on child rearing,
child with developmental disability,
child with developmental disorder